

## 【追悼文】

## 岡本勝先生のこと

日本語日本文化学科

永田典子

私が岡本先生に最後にお会いしたのは、お亡くなりになった3月11日の2ヵ月ほど前であった。その日、先生は検査入院を目前に控え、人文学部事務室で書類の整理をされていた。検査入院は、昨年末から続いている咳と喉の痛みの原因を調べるためとおっしゃっていたが、そのように話される先生は、いつものテノールの張りのあるお声ではなく、二言三言話されるだけでもお辛そうだった。

岡本先生の症状のことは学生たちからも聞いており、もしかしたら12月初めの学外研修旅行に参加されたため、体調を悪くされたのではないかと心配になった。この学外研修は、日本語日本文化学科が毎年2年生を対象に行っている日帰り旅行で、今までは京都・奈良方面に出かけていたが、去年初めて伊勢に行くことになり、その方面にお詳しい先生も参加されることになった。当日は快晴であったが、北風の強い寒い日だった。私は、本居宣長記念館や松阪公園、伊勢神宮などを見学しているうちに風邪を引いてしまい、その後しばらく背中が悪寒と頭痛が続き、授業中も咳に悩まされた。先生から検査入院のことを伺ったとき、てっきり先生も同じように風邪を引かれ、それをこじらせたために検査を受けられるのかと思ひ込んでしまった。だが、その時すでに先生は我が身に宿った病魔の正体を薄々気づいていたのかもしれない。先生は書類を整理する手を止めて、「検査結果を知るのが怖い」と呟かれた。元気づけるつもりで、私は三度の手術と検査入院の経験談をし、「案ずるより産むが易し」などとありきたりの励ましを申し上げたのだが、それでも先生は「怖い」という言葉を繰り返された。そのときの憔悴された面持ち、肩を落とされたご様子は、今でも鮮明に思い出すことができる。

しかし、岡本先生といえば、やはり濃紺のスーツに、奥様お手製のショルダーバッグを肩にかけ、颯爽と歩かれるお姿が最も印象深い。私が先生に初めてお会いしたのは、愛知教育大学の学生として近世文学の講義を受けたとき、今から30年以上も前のことだが、あの頃から先生はダンディーでいらっしやった。当時の先生は30歳代半ばであったが、三つ揃いのスーツ姿にもう少し年配のように思われた。一見厳めしくも感じられたが、『世間胸算用』や『万の文反古』の影印本をテキストとした講義では、変体仮名の読み方を丁寧に指導され、西鶴文学の醍醐味を関西訛りの柔らかな物言いで教えてくださった。時として「一期一会」という言葉で人生観を語られることもあり、また西鶴ばかりでなく、近松門左衛門の作品や俳諧、芸能などに話が及ぶこともあった。特に、大淀三千風の研究書を出版されて間もない頃だったので、三千風の魅力を滔々と語られることが幾たびもあった。

先生の影響で歌舞伎ファンになった者もいれば、私のように文楽好きになった者もいたが、いちばん多かったのは、やはり岡本ファンである。当時は、学生による自主的な読書会が盛んに行われ、教官によっては研究室を読書会に提供してくれたため、研究室はいつも学生の溜まり場ようになっていた。岡本研究室には落語研究会の男子学生がよく出入りし、先生も上方落語のような口調で軽妙に話されるため、研究室は寄席の楽屋のようでもあった。そこに岡本ファンの女子大生たちが集まってくるので、いつも大入満員で賑やかだった。隣室の教官が岡本先生に女性ファンの多いことを羨ましそうに（？）言うと、先生は冗談めかして自ら「花守の翁」と名乗られた。能の「女郎花」か「老松」などを踏まえてのことだろうが、女子学生を花に喩え、30歳代半ばでありながら「翁」と自称するところに先生の奥ゆかしさが感じられた。今思えば、セクハラもアカハラも無縁の長閑な時代であった。

先生は、愛知教育大学退官後に中部大学に着任され、5年間在職された。古典文学の専門科目を担当され、しばしば学生の不勉強を嘆かれていたが、学生たちは先生の篤実な人柄に惹かれ、父親のように慕っていた。私たち教員も実務経験豊かな先生に頼ることが多く、相談に伺えばいつも適切なアドバイスをくださった。普段は周囲の人々を和ませようと気を遣う方だったが、ひとたび教務上の問題が生じれば、会議の席上で鋭く指摘し、歯に衣着せぬ発言をされたこともあった。また、大学院言語文化専攻の主任としてご多忙ながら、学科運営にも積極的に携わり、いろいろな企画をご提示くださった。ロバート・キャンベル氏（東京大学）の講演会や、学科の恒例行事となった御園座での歌舞伎鑑賞会（1年生対象）は先生のご尽力の賜である。昨年、学外研修旅行を伊勢方面としたのも先生のご提案だった。本居宣長記念館を見学したとき、松阪公園の丘から眼下に広がる家並みを眺めながら、この町の文化の重みをお話くださった。「松阪学」を興されただけあって、この町をこよなく愛していらっしゃることがその話しぶりから伺われた。その場を立ち去るとき、「次回は松阪の町を散策してみましよう」とおっしゃったが、残念ながら、その約束は果たされなくなってしまった。

今年は奇しくも大淀三千風の没後300年にあたり、本居宣長記念館では6月に記念の企画展が開催された。岡本先生の調査ノートや著作などが展示されたが、ご存命であれば、三千風研究の第一人者として采配を振るわれたであろう。三千風は全国を行脚し、宝永4年に郷里の松阪で没したという。もしかしたら、先生は300年の時を越えて三千風と松阪のどこかで連句をされているかもしれない。

先生は、一期一会を信条に人との出会いを大切にされた。私も先生に出会えて、わずか5年ではあったが、ご一緒に仕事ができただけに感謝したい。今一度、謹んで哀悼の意を表し、心からご冥福をお祈り申し上げます。